

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Mexican Masks at the National Museum of Ethnology, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004354

メキシコの仮面

—芸能による分類の試み—

黒田悦子*

Mexican Masks at the National Museum of Ethnology, Japan

Etsuko KURODA

This paper attempts to classify, according to genres of *danzas*, the collection of Mexican masks at the National Museum of Ethnology, which now includes part of the former Cordry Collection. The classification schema is as follows: 1) animistic masks including devil, *caimán*, and tiger masks; 2) masks related to pre-Hispanic gods; 3) those for the *Moros y Cristianos*; 4) masks for morality plays; 5) carnival masks; 6) masks for Holy Week celebrations; 7) those for All Saints' Day rituals; 8) death masks; 9) *payaso* masks; 10) masks which function as musical instruments; 11) masks for the *danzas* related to occupations; 12) unknown masks; and 13) decorative masks (mentioned in the concluding remarks). Each of these indices are subdivided, and the major iconographic characteristics of the masks are commented on, emphasizing the visual imagination of folk society.

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 7) 万霊節用の仮面—チャントロー |
| 2. 芸能による分類 | 8) 死の仮面 |
| 1) 生き物や自然の力に関わる仮面 | 9) 道化仮面 |
| 2) 先スペイン期の神々に由来する仮面 | 10) フィエスタに附随する仮面 |
| 3) モロとクリスティアノスの仮面 | 11) 風俗、職業に関わる芸能の仮面 |
| 4) 寓意劇、縁起物用仮面 | 12) 芸能名が不明な仮面 |
| 5) カーニバル仮面 | 3. 結びにかえて—仮面の将来について— |
| 6) 復活祭用の仮面 | |

* 国立民族学博物館第4研究部

1. はじめに

メキシコの仮面は種類が極めて多い。その理由の一端は歴史的に説明がつかうだろう。先スペイン期に、既に仮面は作られており、死者の顔を覆うための仮面があったことは考古学資料から明らかであるし、色々な儀礼に仮面が使われたことは、コディセとよばれる古文書に載せられた絵や土器に描かれた絵から明らかである。このように仮面を作る習慣のあった社会にスペイン人が侵入し、カトリックの布教のための芸能や宗教劇の上演に仮面を使ったので、仮面の製作意欲は大いに助長されたと推測される。しかし、この頃、スペイン人が、どのような仮面を持ってきたかについては資料がないので、土着とスペインの伝統が、どのように接触したかを、具体的には論じえない。

二文明の接触から時間が経ち、征服者による支配と彼等のもたらしたカトリックがメキシコに定着するのが、16世紀から19世紀初頭までの植民地時代で、この期に各地域や各民族集団における民俗カトリックの有り様が決まり、それにつれ、芸能と仮面の地域差が大体において形成された、と推測される。

これに続く19世紀は、独立と改革の世紀で、社会動乱が続き、芸能にも変化が起こった例が多いので、仮面にも何がしかの変化があったらうとは思いますが、これについても資料がなく、概括しにくい。それにしても、3世紀に及ぶ植民地時代に定着した民俗カトリックの芸能を支えてきた仮面が19世紀に少々変化をこうむりながらも、今世紀にまで伝達されたわけで、お蔭で、現在、私達は数々のメキシコの仮面を見ることができるのである。

メキシコの仮面の歴史を語ろうとしても、推測の域を越えない発言しかできないが、次の二つの事実は明らかである。第一には、アニミズムを許容した民俗カトリックがメキシコの仮面を保護し、豊かにしたことである。第二には、色々な民族集団が存在していたため、仮面のバリエーションが極めて豊かになったということである。この認識を得た後、実際に私達ができることといえば、現在の「民俗社会」に見出される仮面に接し、一点一点を見分け、そこから得られる知見を大切にすることであろう。

現在のメキシコで仮面を持つ「民俗社会」とは、仮面が収集されている地名から判断して、私は次のような社会の種類を想定している。第一は、現在のインディヘナ（インディオ）社会であり、植民地時代の芸能を濃厚に残している社会である。この範疇には色々な社会がある。ミヘ（族）のように植民地時代の文化を形どおりに受容した社会もあろうし、ツォツィル（族）のように、外来の文化を自分流に再解釈した社会もあろう。第二は、或る時点まではインディヘナ社会といえる社会であったが、

社会・経済・文化上、脱インディヘナ化した社会であり、典型例には、ジョージ M. フォスターの調査したツィンツンツァンが挙げられる。ツィンツンツァンは元々はタラスカ（族）の村であったが、フォスターをして「農民社会」とよばしめた局面の多い社会で、成熟した民俗カトリックが見られる。第三は、いわゆるメスティーン社会であり、町であれ、都市であれ、たとえメキシコ・シティ内であれ、民俗文化を潜在的に有している社会である。上記の三社会はいずれも仮面を持っているが、実際に私が目にした仮面資料のほとんどは第一と第二の社会から由来している。

私が実際に手に取って見た仮面は国立民族学博物館所蔵の409点である。当館のメキシコの仮面資料はドナルド・コードリー氏の著名なコレクションの部分的購入に始まり、ニューヨークのコレクターからの数回に渡る購入で増加し、1985年には第4研究部の八杉佳穂氏による収集品が加わり、現有の点数は409点にのぼっている（1986年12月末調べ）。

現物の仮面にも資料がついているが、一つ一つの仮面の判定に役立つ文献資料は意外と少なく、主として図録からなる数点 [FONADAN 1975; INSTITUTE DE LA ARTESANÍA CHIAPANECA n.d.; JACOBSON and FRITZ 1985; MONTENEGRO n.d.; OGAZON 1981; SEPÚLVEDA HERRERA 1982; SOCIEDAD DE ARTE MODERNO 1945] と若干の論文 [ESSER 1978, 1983; GILLMORE 1983; LUTES 1983] を越えず、仮面を全面的に扱った単行本はCORDRY [1980] と Moya Rubio [1978] の二点に過ぎない。しかし、Kurath [1967], Martí [1961], Mompradé y Gutiérrez [1976], Salmerón y Horcasitas [1974] に載せられたフィエスタの場で使われている仮面の写真、図、説明が私の理解を大いに助けてくれた。

2. 芸能による分類

仮面は形、材質、色、被り方、地域、等々、色々の指標により分類が可能である。しかし、芸能による民俗仮面の分類は仮面の全体像を知るための第一歩である。何故なら、現在の民俗社会で使われるほとんどの仮面はカトリックのフィエスタをにぎわせる芸能に使われているからである。それに、そもそも、メキシコの仮面への私の興味はミへの村々でフィールドワーク中にフィエスタの最中に現われた仮面に驚きを覚えたことから始まったので、仮面を芸能の脈絡で理解したいと私は前々から思っていたのである。

村で仮面が実際に使用される様子を見ていると、興味深いのは、踊り手が仮面をつけて動き始めるやいなや、仮面が生きた表情になることであった。この瞬間の驚きを

仮面の分類に生かすことが必要で、収蔵庫で死んだように並んでいる仮面に芸能という息吹きをふきかけて生かしてみよう。一つ一つの仮面がどの芸能にどの配役で現われるのかを考えると、仮面が脈絡と役割を得て、動きはじめるのである。

自ら仮面を収集し、概括を試みたのは Cordry [1980] と Moya Rubio [1978] の二氏であるが、二人の内 Moya Rubio だけが仮面を芸能に引きつけて考察している。彼はダンス用と祝祭用に二大別しているが、芸能のジャンルを頭に入れて考えてみると、この区別は有効とは思えない。二者は現実には重複しているからである。また、彼の区別による仮面の配列と説明も整理されておらず、読者に混乱を招く。そこで、芸能を指標として、より系統的に、簡便に仮面を見分ける案内になるように、分類の一つの試みを以下に記してみる。

なお、本稿で使うダンスはスペイン語の *danza* の訳であり、民族誌の脈絡からいうと、ダンスもあれば民俗劇もある。一つ一つの記述に区別をもうけず、ダンスとだけ記したのは、各地での演じ方について詳しい資料がない限り、厳密には区別しにくいからである。

白黒であるが写真がつけてあるので、写真を参照しながら、本文を読んでほしい。写真のキャプションには仮面の名称だけつけて、仮面という字は省略するのを原則とした。例えば、牛悪魔と書いていれば、牛悪魔の仮面と考えてほしい。仮面の使用地（製作地しかわからないものには製作地を記した）を示す地名に町とか村とか書かなかったのは、その区別は厳密に考えると不可能だからである。民族名は必要な時、例えば、地名不明の折にのみ記した。[] 内の数字は本館の標本資料番号である。資料を楽しむためには、一点一点につき紹介が要るが、本稿のテーマと紙幅の関係上、別の機会に譲る。

1) 生き物や自然の力に関わる仮面

この種の仮面はカトリック教以前のアニミスティックな世界観に支えられた土着性の強い仮面で、メキシコ全般に広く根ざした感性を表現したものといえよう。一見、カトリックの芸能と無縁に見えるが、実は祭日に踊られるものが多い。そして、(3)の悪魔仮面などは分類の3)以降の芸能に賛助出演する機会が多く、仮面からみても、アニミズムの世界はカトリックのフィエスタに組み入れられているといえよう。本来アニミスティックな世界は分類を拒否する性質のものであろうが、1)の種類の仮面を敢えて6つに分けてみた。

(1) コーラ、ウィチョル、ヤキ、マヨ（族）の仮面



写真1 鹿 ナヤリート州 コーラ (族)
[標本資料番号 131806]



写真2 パスコーラ ソノラ州ヤキ
(族) [132576]

具体的には、コーラの復活祭用の動物仮面(写真1)、ウィチョルの収穫祭用のタテ・ナカウェー (Tate Nakawé) 仮面、ヤキやマヨのパスコーラ・ダンス用のパスコーラ仮面(写真2)である。パスコーラは森の動物から得た知恵を持つ道化であり [CORDRY 1980: 56; LUTES 1983], 鹿(仮面はなく、踊り手は頭上に鹿の頭をつけている)と一緒に踊り、道化する。いずれも、狩猟民的シンボリズムを濃厚に持っている社会の仮面で、芸能というよりは宗教儀礼のために使われるといった方が現実に近いだろう。

(2) 動物、虫、魚、等の仮面

ゲレロ州の仮面には動物、虫、魚、等の生き物を形どったものが多く、ナワ由来のシンボリズムがこの地方に受け継がれているという Cordry の判断 [1980: Chapters 8, 9] に同意することになる。現在、当館に所蔵されているコードリー・コレクションの内、仮面師 José Rodríguez の作品には、この種のシンボリズムの過剰にしてダイナミックな表現がみられる。彼は教会付きの彫刻師の子孫と推定され、道具や材料に恵まれていたプロの彫り師の技術を踏襲しており [CORDRY 1980: Fig. 206], この技術を駆使して生き物の躍動する世界を表現した。

動物のダンスに使用されたセットになった仮面(写真3)は動物の主に率いられて踊ったらしいが、現存するダンスではない。他に、死を表わした鼻仮面は鼻のダンスに使われたとのことであるが、トウモロコシを表わした仮面は使用されたダンス名

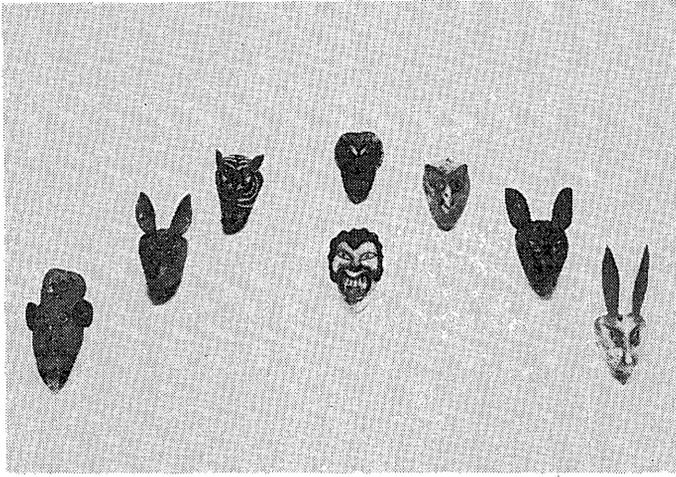


写真3 (左から) 犬, ロバ, ラバ, 動物の主(2), 梟, 犬, 兎
ゲレロ州 [68155-68162]

が不明である。図像からみて、これらの二点と後述する悪魔仮面の類似は大きいが、これら二点には悪魔仮面という表記はされていない。

一群の生き物を表わす仮面をつけた人が踊る例は収穫を祝う踊りにもみられる。このダンスにはさそり、蛙、キリギリス、土ぐも、アルマジロ、犬、バッタ、かに(写真4)の仮面が出演して、10月の収穫の終わった畑で踊ったとされている。この一群の仮面は1900年頃 Bahena 家族の手で彫られたとされている [CORDRY 1980: Figs. 252-256]。一つ一つの生き物の中央に人面がつけてある仮面で、写実性が強い。

動物や虫類の仮面が群れになって踊るダンスが他にもあることはニューヨークのコレクターの持ちこむ資料からもわかる(添付資料が少ないので購入していない)。しかし、上記の動物のダンスや収穫のダンスの仮面は今では作られておらず、一般的傾向として、この種のセットになった仮面は現在は少ない、と私は判断している。

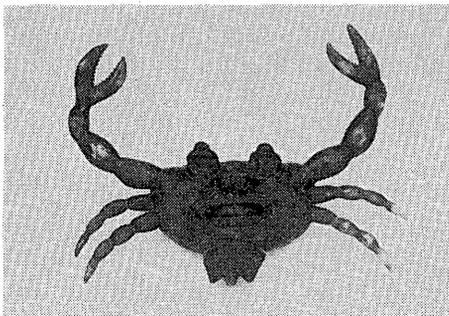


写真4 かに ゲレロ州 [68140]

(3) 悪魔仮面

悪魔はカトリックが持ちこんだ概念であり、恐ろしき存在として教会人が人々に教えこみ、その魔力の故に、(2)の土着の動物や生き物の図像と習合した、と一般に考えられている。しかし、ヨーロッパの悪魔をステレオタイプ化

するわけにもいかない。教会の公式の教えでは悪魔は恐ろしき悪しき存在であったが、ヨーロッパでも民俗社会では親しみ易い悪魔があったようである。Jeffrey Burton Russel の悪魔論 [1984] によると、悪魔とはキリストと善なるもの以外のすべてを包含するブラック・ボックスであり、ヨーロッパの民俗社会の悪魔像には柔軟なバリエーションがあった。そのようなわけで、一極にヨーロッパの悪魔、他極にメキシコ土着のアニミスティックな象徴を置いて、二つの間の振幅内に各々の悪魔仮面を配列するのはむづかしい。

そこで、必ずしもシンクレティズムにこだわらず、芸能を軸にして悪魔仮面を分類してみよう。すると、悪魔仮面の一部は後述する宣教のための 勧善懲悪劇である



写真5 悪魔 ミチョアカン州 [108409]



写真7 牛悪魔 グアナファト州 セラオ [108474]

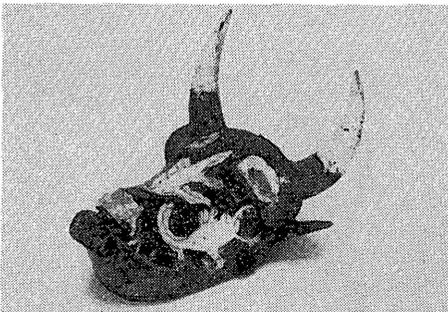


写真6 牛悪魔 グアナファト州 [117828]



写真8 悪魔 ゲレロ州 シトララ製作 [131696]

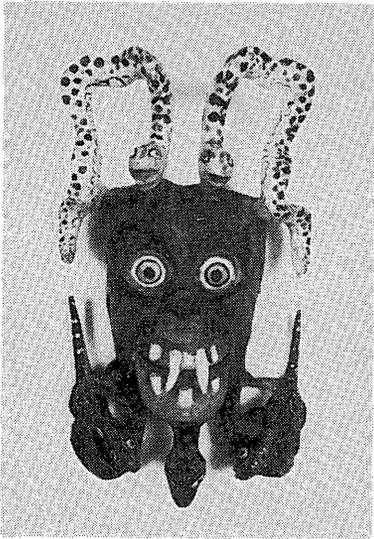


写真9 悪魔 ゲレロ州 トラパ [68147]



写真10 大悪魔 ゲレロ州 クアドリリータ
・デ・サンタ・アニタ [68163]

「牧人のダンス」と「三つの魂の力のダンス」に使われ、また特定の悪魔仮面は雨乞いのダンスに使われるが、大多数は数々の芸能に出場して、道化役をつとめていることがわかる。

「牧人のダンス」用の悪魔仮面は人面に角のついたもの(写真5)、その人面に生き物の図像のつけてあるもの、さそりを顔面につけた牛悪魔(写真6)、牙や歯をむき出した人面悪魔(写真7)の三種類がみられる。

「三つの魂の力のダンス」用の悪魔仮面(写真8)は例数が少ないので、概括しえない。

雨乞いのための悪魔仮面は当館の所蔵品では José Rodríguez の作品が多く、蛇、とかげ、竜など水に関わる図像をつけた一連の人面仮面(写真9)と「大悪魔のダンス」用の一連の仮面(写真10)などがある。いずれも、水に縁の深い図像が人面につけられており、角はない。悪魔と名づけられているが、本来は(2)の分類の動物や虫や生き物の仮面の方に近い存在だった、と私は推測している。

用途について情報のない悪魔仮面は上記のバリエーションのどれかに入る。中で目立つものとして、白人の人面に角のついた典型的なヨーロッパ型の悪魔(写真11)と復活祭やカーニバルに使われる角だけついているが恐ろしさのない人面仮面(写真12)がある。

この恐ろしさのない仮面とは Moya Rubio の指摘している「微笑する悪魔」

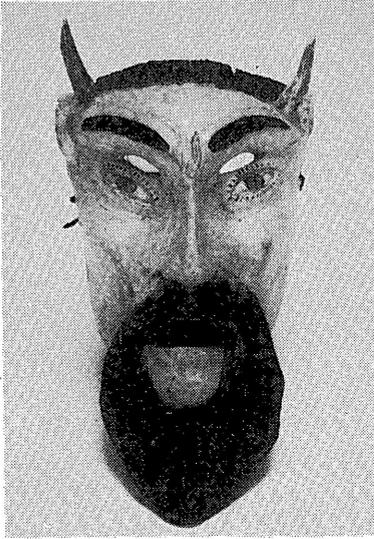


写真11 悪魔 ゲレロ州 [108376]

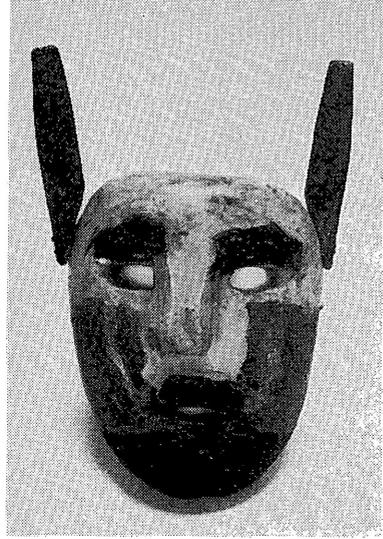


写真12 悪魔 ベラクルス州 [108444]

[MOYA RUBIO 1978: Figs. 98, 99], 「善い悪魔」 [Fig. 103], 「悲しそうな悪魔」 [Fig. 104]に通じるものであろう。当館にも「楽しそうな」とか「考え深そうな」と表現してよい悪魔仮面があり（写真 13）、メキシコの民俗社会はカトリックの教条的定形を柔軟に変形しているといえよう。

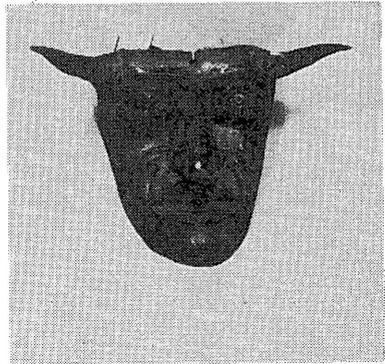


写真13 悪魔 ゲレロ州 [131707]

(4) 雨乞いのための仮面

前述の(3)の悪魔仮面の中で水に縁の深い凶像をつけた仮面が雨乞いに使われている。他に、アルマジロ仮面やこうもり仮面が雨乞いに使われていたことは仮面に添付された資料から判断できる。

加えて、現在では入手できない特異な仮面が三種ある。いずれもコードリー・コレクションにあったものである。第一はセットになった銀製の仮面で（写真 14）、1890—1910年の間の作品とされ [CORDRY 1980: Fig. 21], 額から口にはう蛇が水を呼ぶ象徴となっている。ゲレロ州の鉾山地帯で作られ、12個の仮面でセットになっていたが、この製作年代以降、この種の作品は途絶えている。

第二は Bahena 家族の作品で、小人仮面と称され（写真 15）、子供が被り、雨期の開始前に洞穴で踊って雨を呼んだとされている。この仮面も1910年頃から姿を消した



写真14 雨乞い用仮面 ゲレロ州、カンボ・モラード [68142]



写真15 小人仮面 ゲレロ州 カンボ・モラード [68129]

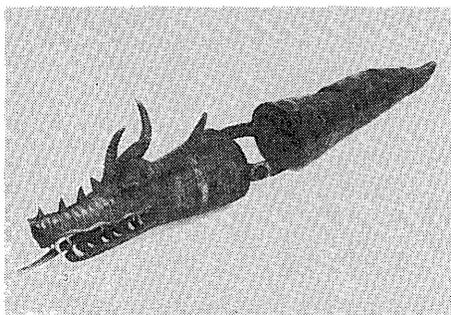


写真16 蛇 ゲレロ州 [68130]

[CORDRY 1980: 188]。

第三は大型の蛇の仮面で、胴体に入りが入り、頭にも別の蛇の仮面をつける(写真16)。

上記の三種はいずれも20世紀の初めに製作が終っており、高級な手のこんだ雨乞い仮面は姿を消したといえよう。

(5) 魚のダンス、わにのダンスの仮面

ゲレロ州バルサス河附近の村々やミチョアカン、チアパス州からの資料があり、踊り方に差が大きくありそうであるが、豊漁を願う芸能用の仮面である点で一致している。木彫の魚のアクセサリを腰や肩につけた漁師が大勢網を持って出場し、魚を支配しているわにや精霊をなだめて魚を取るという筋である。

出場する仮面はわに(写真17)、河の霊 [CORDRY 1980: Fig. 296]、漁師(黒く塗った顔に斜めの赤や黄の線が走り、タバコを口にくわえている)(写真18)、人魚(写真19)がある。わに仮面には子供が胴に付けるものもある [MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 133]。人魚はヨーロッパ由来とは限らず、先スペイン期に存在し

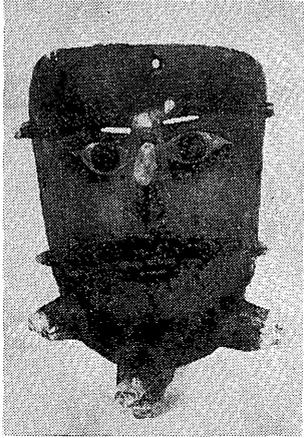


写真17 カイマン (アメリカ・ワニ) ゲレロ州 チャパにて製作 [131714]



写真18 漁師 ゲレロ州 [108377]



写真19 人魚 ゲレロ州 アルタミラーノ [68139]

たという説もあるが [CORDRY 1980: 203], 人魚仮面の出番については資料がない。

(6) 虎ダンスの仮面：虎，屠殺者，農民，テホロン

魚やわにのダンスが水の幸を祈願するものなら，大地や山の幸を願って踊られる芸能は虎ダンスである。バリエーションが多く，それにつれて仮面の種類も変わる。

虎ダンスのジャンルに入る芸能として主なものは虎ダンス，テクアン，テクアニ，テホロネス，トラコロレロ（農民）があり，ダンス名と地域により差があるが [MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 117-124]，一般に虎，屠殺者（もしくは銃を持つ老夫婦），農民，獣医，鹿，犬の持ち主，犬，はげたか，等が出場する。所により配役は複雑になり，アシエンダの持主や管理人も出る。

虎ダンスの詳しい上演例としては連邦州のサン・フランシスコ・クワウソスコ (San Francisco Cuauzoscó) 村のテクアン (Tecuán) ダンスがある [FONADAN 1975]。テクアンとはナワ語で「食いつぶす」という意味で，虎（ジャガー）の破壊力と豊饒性を表わしている。アシエンダで鹿などをいじめたり（もっとも鹿も若木や作物を食べて農民に迷惑をかけているのだが），作物を荒らす虎を犬で追い立て，鉄砲で打ちとめる筋で，途中で傷ついた小動物が医者の手当てをうける。配役の内，アシエンダの所有主ドン・サルパドル，秘書，管理人，医者と看護役，鉄砲の打ち手（＝屠殺者），アシエンダの農民が仮面を被っている。虎と鹿と犬は布で張ったヘルメット仮面をつけている。犬の持ち主ドン・クレートは素顔で，アシエンダ所有者の助手のパイェソも口ひげと眼鏡だけ付け，素顔である。はげたか役の子供は布張りのはげたか

風の帽子を被り、顔は素顔である。全員で28～32人の配役になり、木製仮面、布の仮面、布の帽子、口ひげや眼鏡をつけた顔、素顔という差がある。

クワウソスコ村は近くにアシエンダが存在していた所で、台詞つきで上演される虎ダンスに村の歴史が反映されており、村の社会史を示すフォークロアになっている。一方、永田収氏が撮影され、当館が研究用フィルムとして購入したゲレロ州のアムスゴ(族)のショチストラワカ村(Xochitlahuaca)の虎ダンスには別の演出がみられる。虎が農作物や鹿をいためつけて農民が困り、鉄砲を持っている老夫婦を説得して、虎を打ちとらせる筋であるが、老女(男が女装している)と虎のパフォーマンスが人を楽しませる。一群の農民、老人、老女、虎、犬だけが仮面をつけ、鹿は毛皮を頭に被った男が演じる。配役はクワウソスコの例より簡略で、アシエンダの存在を思わせるのは仮面をつけた一群の農民だけで、虎に向かって犬と老人が立ち向かい、老女が性的冗談の対象になっている。

たった二つの村でも出場する仮面にこれだけの差があるのだから、虎ダンス用の仮面について概括するのはむづかしいが、老人、老女、鹿、犬、医者 of 仮面は資料にそのよう記入されておれば、それ以上に分類上の複雑性はない。種類が多くて、区別にとまどうのは虎、屠殺者、農民、テホロン(言葉の意味は不明であるが、虎を退治する人々として出場する)の仮面である。

虎仮面については一つ一つの村に一つのタイプの虎がある、としか言いようがない程に個性的な虎が多い。虎ダンスのジャンルの小区分に従って虎仮面を分類するのは不可能と思うので(ゲレロ州のコスタ・チカやオアハカ州のハミルテペック地方にみられるテホロンのように明確に区別のつくものは別にして)、形や図像から区分してみよう。

先に言うておくべきであったが、「虎」とはジャガーのことである。スペイン語で「虎」と記され語彙として定着してしまったが、実際にはジャガーと大山猫(ocelot)を含んでいるらしい。虎仮面のなかには、幅広の黄色の顔で丸い黒い斑点のついたジャガーの特徴をそなえた仮面(写真20)と幅狭の顔で、とがった口から牙をむき出している山猫風の仮



写真20 虎 ゲレロ州 テナギーリョ・デ・ラス・カーニャス [68122]

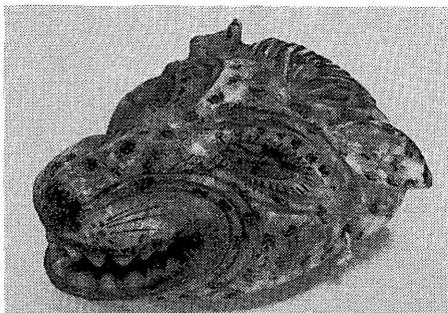


写真21 虎 ゲレロ州 タスコ [68120]

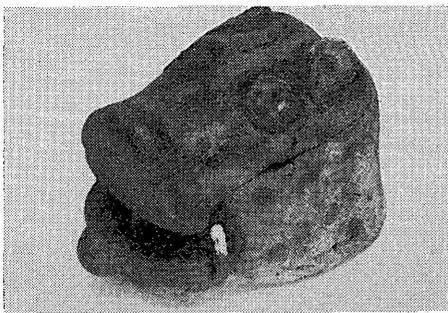


写真22 虎 ゲレロ州 ラ・クルス・グランデ [68091]



写真23 虎 ゲレロ州 アカトラン・デル・リオ [68124]

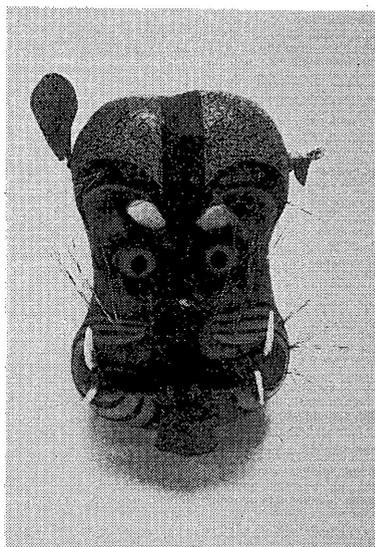


写真24 虎 ゲレロ州 オリナラー [68109]

面（写真 21）の二大別が目につく。両方の特徴がまざって、ジャガーか大山猫か区別のつきかねる仮面も多い。黒い虎仮面もあって、作者は黒ジャガーの存在を知っていたらしい。平凡社の百科辞典によると [今泉 1985]、赤褐色のジャガーも居ることであるが、コードリー氏の虎コレクションの一点に赤褐色と黒の斑点の目立つジャガーがある（写真 22）。また、同辞典によると、肩、背、脇にかけて梅の花状の斑紋のついたジャガーがいるそうだが、梅の花模様を額と顎につけた虎仮面が一点あり（写真 23）、作者の観察の確かさをうかがわせてくれる。

虎仮面には動物の描写に正確なものだけではなく、様式化の進んだものもある。オリナラーの独得の隈取りの仮面（写真 24）やシトララの皮製のヘルメット仮面（写真

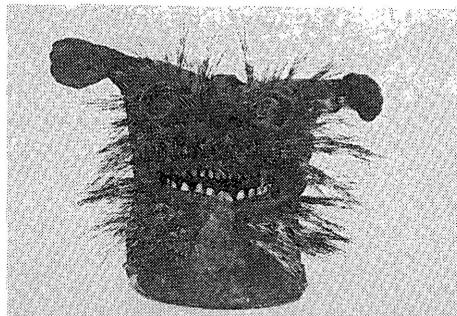


写真25 虎 ゲレロ州 シトララ [68686]



写真26 ラストレロ (屠殺者) ゲレロ州
アルタミラーノ [108470]

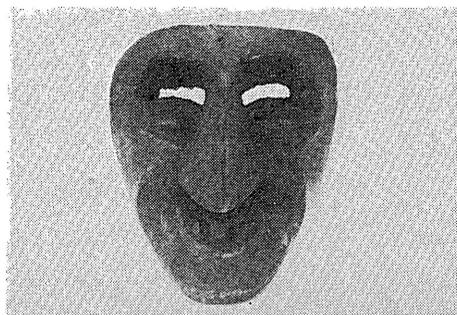


写真27 トラコロレロ (農民) ゲレロ州
[131704]



写真28 トラコロレロ (農民) ゲレロ州
アメヤルテベックにて製作
[131700]

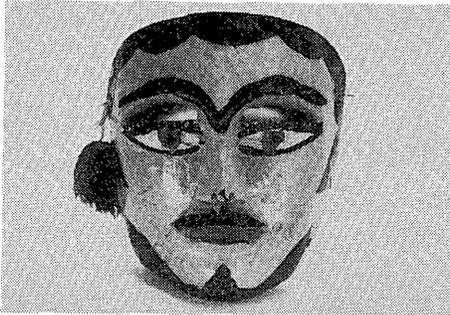


写真29 虎を狩る人 オアハカ州ミシュテカ海岸部 [108413]

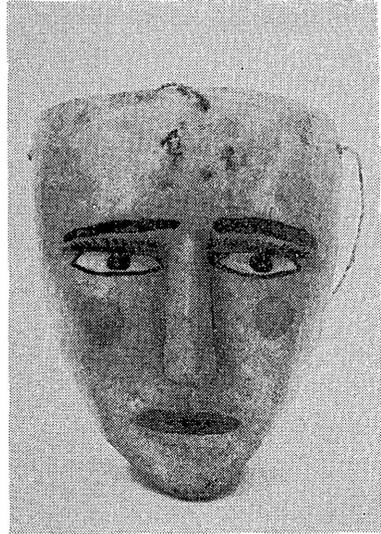


写真30 テホロネスのダンスに出る女性
オアハカ州ミシュテカ海岸部
[131868]

25) は独得である。

アムスゴの村の例では、老人が虎をしとめるが、大方の例では屠殺者 (rastrero) がいて虎を打つ。雄猛な虎を打つ役のせいから、目のきつい野性的な顔にひげのついた仮面で、口がひん曲っているのが特徴である (写真 26) (典型例は [CORDRY 1980: Figs. 212, 300] を参照)。

農民 (tlacololero) の仮面は殆どがトラコロロスのダンスに使われるが、仮面に添付された資料から判断するに、トウモロコシの収穫祭やカーニバルにも出る。いかにも土くさい、たくましい顔が基調で (写真 27)、近年の作品には顔の左右を二色に塗り分けたものがある (写真 28)。Cordry ものべているように [1980: Fig. 216], これは新しい物を求める遊び心であろう。

テホロン (tejorón) の仮面は虎ダンスの一種であるテホロネスのダンスで使われ、ゲレロ州のコスタ・チカ方面とオアハカ州のハミルテベック方面に限られている。虎を捕まえる男子の仮面の典型例があるが (写真 29)、この顔の周囲に山猫や兎の毛をつけたものもある。男子の仮面に混じって虎の捕獲の場に居合せ、モレ料理 (おそらく虎の肉で作る) を作るふりをする女性の仮面 (写真 30) は目が大きく、頬と口に紅の目立つものである。メキシコの仮面のなかでは女性仮面は少なく、特別の役柄 (例えばマリンチェ) でない限り、上記の特徴が一般的で、スペイン系の女性を表わした



写真31 (左) 虎を狩る人, (右) 女性 オアハカ州 ピノ
テパ・ナシオナル [108475, 108354]

写真32 虎を狩る人 オアハカ州
ミシュテカ海岸部 ドン
・ルイス [131939]

ものと思える。

テホロネスのダンスの仮面の古い型ではないかと思える男女の仮面がある(写真31)。一方、新しい仮面には人面の顎に小さな顔をつけたものもあり(写真32)、新旧の作品の違いが大きい。

虎ダンスはメキシコに広く分布し、地方色が極めて強い。チアパス高地ではツォツィル(族)の間でジャガーをめぐってゲレロ州や

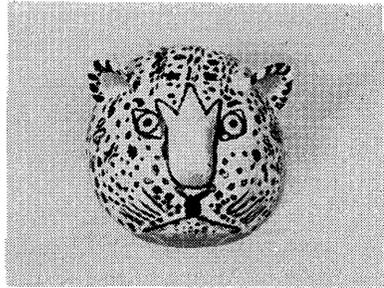


写真33 虎 チアパス州 スチアパ
[68118]

オアハカ州と異なるフォークロアがある(例えばシナカンタン村では性的豊饒性をそなえたジャガー、チャムラではそれに加えて神の保護者としてのジャガー、チェナローではジャガーは「背の十文字男」と同一であるというフォークロアがある[ブリッカー 1986: 103, 113, 168, 180-181, 207-208]。そして、チアパスで踊られる虎の出場するカララー(Kalalá 鹿)のダンスの古い型には虎が出場しない。元々、このダンスは山の神の幸を表わす鹿のダンスであった様子であり、いつの頃からか虎(写真33)が加えられた[MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 123-124]。これは一体何の変化を表わしているのか、等々、マヤ圏のジャガーと虎仮面については、さらに多くの情報と仮面資料が必要である。

2) 先スペイン期の神々に由来する仮面

前述の虎仮面の虎はアステカの神テスカトリポカの変身だとされているし、動物や

虫や生き物の仮面や悪魔仮面に土着の神々が残っているが、ここに別項目をもうけたのは、土着の神の名前が仮面に残っている例があるからである。当館の収蔵品には欠落している種類の仮面であり、なかなか手に入らないと思うが、分類上無視できないので取扱うことにした。

第一に、チアパス高地のシナカンタン村のサク・ホル(Sak-Hol)仮面がある。同村のサン・セバスティアン祭で「白い頭」といわれる配役がつける仮面で、下地は皮で上に銀紙がはってある。Cordry [1980: 91-92] は先スペイン期に使われたサイズが半分の仮面のなごりであると考え、Bricker [1981: 139-140] はアステカの雨の神トラロックにつながる仮面と考え、テオティワカンやトゥーラの遺跡にみられる「先が三つに分かれた図像」(☞ 雨, 水, 血に関係がある) から由来した形ではないかと推測している。

第二は旅、商人、商売と関係の深いアステカの神ヤカテクトリ(Yacatecuhtli)である[CORDRY 1980: Fig. 268]。この多彩色の鼻の強調された仮面は文献に一点しか例がないので、例外的存在なのかどうか、私には判断がつかない。

第三に、先スペイン期の火の神がウェウェ(Huehue)仮面に継承されていると一般に考えられている。この仮面については道化の仮面の項目でのべる。

3) モロとクリスティアノスの仮面

「モロとクリスティアノス」とは国土回復運動期のスペインに起源のある芸能で、異教徒モロ(ムーア人)がクリスティアノス(キリスト教徒)に敗北する筋が演じられる。この芸能は、新大陸発見後すぐに植民地に持ちこまれ、征服と宣教を誇示する芸能として広められた。その結果、現在では、このジャンルに入る芸能のバリエーションが多く、地方による差も大きい[MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 124-194; WARMAN 1972]、すべてのバリエーションが仮面を伴うとは限らない。

当館にある仮面には「モロ」「モロとクリスティアノス」と書いてあり、それ以上には情報のないものが多い。この場合、仮面が「モロとクリスティアノス」のどのバリエーションに使用されていたのかは不明である。そこで、以下に試みた分類では、仮面が使われる芸能名が判明している例だけを取り上げ、モロ仮面に加えて出場する他の仮面に言及しよう。

(1) アステカのダンスの仮面、コンキスタ(征服)のダンスの仮面

アステカの没落を物語るダンスには多くの配役、つまり多くの仮面が出てくるはずであるが、詳細は不明である。コディセ(古文書)に出てくるような鼻が誇張された

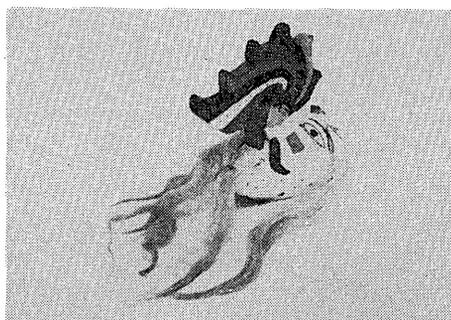


写真34 アステカの戦士? ベラクルス州
サコアルパン [108434]



写真35 アステカの戦士 ゲレロ州 ト
ラルココティトラ [108392]

人物仮面 (写真 34), 鷲を頭に頂いたチチメカの戦士の仮面 [CORDRY 1980: Fig. 131], ジャガーを頭につけたジャガーの戦士の仮面 [CORDRY 1980: Fig. 191], マリンチェの悪魔仮面 (角が魔性を表わしている) [CORDRY 1980: Fig. 215] 等が出場する様子である。

アステカと名づけられた仮面でコンキスタ (征服) のダンスに使用されることが表示されている場合もあり, 例としてアステカの戦士 (写真 35) がある。

(2) テノチトリのダンスの仮面

テノチティトランの陥落をテーマにしたダンスで, ゲレロ州アカトラン (Acatlán) 村の例が最もよく知られている。この村で出場する仮面はコルテス, マリンチェ, マリンチェの母テレサ, アステカの兵士, 道化のウィキストレ (Huiquistle 後述する道化 Huixquitlis のことであろう) の仮面である。村によっては, クワウテモック, パスクワル・バイロン (Pascual Bailón 今のところ詳細は不明), 黒人の仮面も出場するそうである [CORDRY 1980: Fig. 10]。このダンスについての情報は少なく, 詳細は捉えがたい。

当館には用途がテノチトリのダンスと記入された仮面はないが, 配役が同名の仮面は収蔵されており, 各々該当する分類項目の箇所の説明しよう。

(3) コルテスのダンスの仮面, マリンチェのダンスの仮面

これら二つのダンスに具体的にどの種の仮面が出場するかについて資料がない。コルテスとマリンチェの仮面のみが目立つ。

コルテスの仮面は概して幅広の思慮ありげな表情をとっている(写真 36)。逆に、マリンチェ仮面はどんな平凡な作品でも精力的な強い表情をしている。

非凡な作品はなかなか入手できず、

Cordry の本 [1980] に例を見るだけである。これらから判断するに、マリンチェ仮面はアステカ、テノチトリ、マリンチェ、牧人(後述する Pastorela)のダンスに出場する。仮面の特徴は欲望や放縦を表わした赤やピンクの顔、赤い髪、魔性を表わす角やとかげの図像(額や鼻につけてある)である。華々しきは先スペイン期の「戦士の魂」を象徴した蝶の図像を顔の周囲につけたマリンチェ仮面もある [CORDRY 1980: Figs. 44, 215, 259, 276-278]。

上記のコルテスとマリンチェの仮面に見られるコントラストは民俗社会がこの一對の男女に付与したイメージを幾分明らかにしてくれる。征服者コルテスは意外にも人々の想像力をかきたてていない。一方、マリンチェは征服者に与したため、その内な

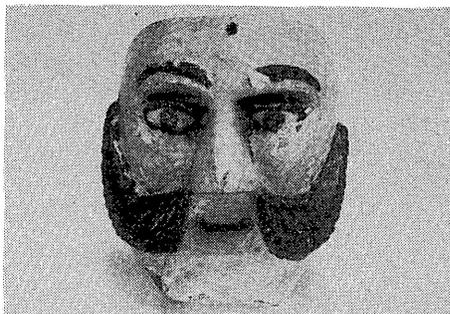


写真36 侯爵(コルテス) ゲレロ州 [108380]



写真37 モロ(ムーア人) ゲレロ州 [108364]

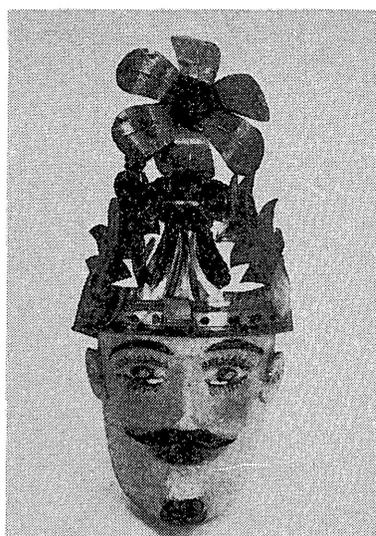


写真38 モロ(ムーア人) ミチョアカン州 [126917]

る異人としての存在が仮面製作者の創作欲をかき立てたらしく、土着社会で特別の意味のある色や象徴を駆使して、この女性の力と魔性を表現している。

(4) モロの仮面

モロ（ムーア人）の仮面には使用されるダンス名が記入された資料が少なく、「モロとクリスティアノス」のジャンルに入る色々なバリエーションの芸能に使われる可能性も考えられるので、モロの仮面を芸能との関係で分類するのは難しい。そこで、図像上の特徴を主にしてタイプを見ていこう。



写真39 モロ・チノ ゲレロ州 (左) カレラス (右) チルパンシンゴ [108369, 139354]

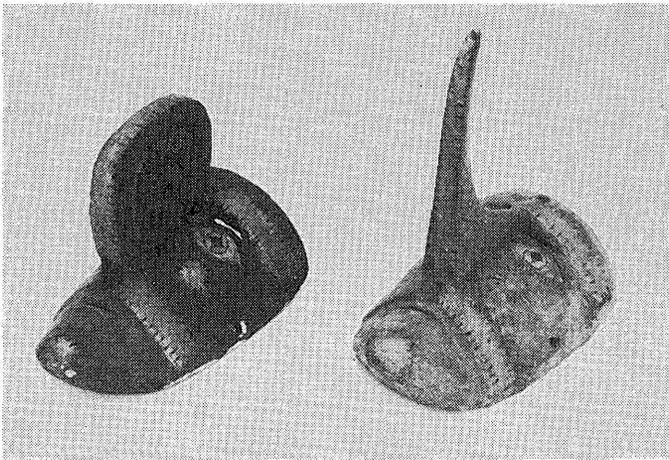


写真40 モロ・パシオン ゲレロ州 [131698, 131699]

モロの仮面の一般的特徴は赤ら顔、きつい目、大きい口ひげと顎ひげ、大きめに開いた口である(写真 37)。例外も多く、赤と黒の混じった顔、ピンク、ヴェージュ、白の顔もある。イスラムを表わす三日月形の冠を被った仮面もあるし、花模様をあしらったブリキの冠をつけた華やいだモロの仮面もある(写真 38)。

上記の例から派生したものにモロ・チノ(Moro Chino ちぢれ毛のムーア人の意か?)とモロ・パシオン(Moro Pasión 受難のムーア人)の仮面がある。前者はモロの仮面の特徴の一つである眉の線と顎から口に流れる線の強調という点をさらに押しすすめたものである(写真 39)。モロ・パシオンは受難のムーア人と訳されようが、「苦しみ」を表わすのは鼻の強調にある。鼻がぐるぐる巻かれているものと、鼻が長長と突出したもの(写真 40)の二種ある。ぐるぐる巻きの鼻について、Cordry は、蝶のシンボルで花と美の神を表現していた、と判断しているが[CORDRY 1980: Fig. 285], 詳細は不明である。既にのべたヤカテクトリ(Yacatecutli)やアステカのダンスの仮面(写真 34)、それから後にのべるマタチネスのダンスに登場する人物仮面(配役を判定できない)に鼻の突出もしくは強調があり、この特徴が何を表わしているのか不明である。モロ・チノにもモロ・パシオンにも眉と顎骨に当たる部分に金色の帯が浮出されているが、これはモロ・チノ仮面の特徴が様式化されたもの、と判断できよう。

以上、モロの仮面の色々の種類をみたが、メキシコの人々が実際に見ることも少なく、スペイン人と違って文化的にも縁の少ないムーア人を作品にするに当たって、仮

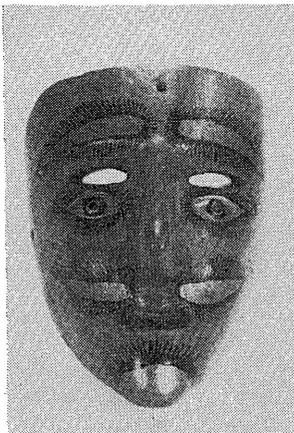


写真41 サンティアゴ プエブラ州
ラ州 ケツァラン
[108416]

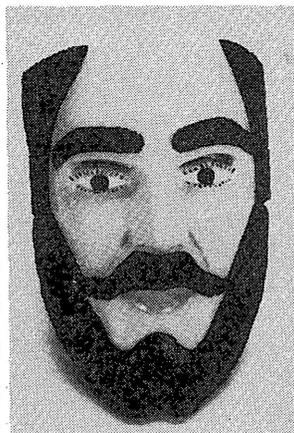


写真42 御主 ミチョアカン州
トクアロにて製作
[131850]

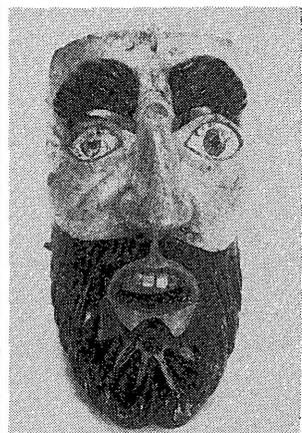


写真43 ピラト ベラクルス州
ナオリンコ [108476]

面製作者達は恐ろしきイメージ、華やかなイメージ、様式化したモロ・チノとモロ・パシオンといった風に、各種の造形を楽しんだといえる。

(5) サンティアゴのダンスの仮面、セニョール（御主）のダンスの仮面

異教徒に対してサンティアゴ聖人やキリストが勝利を納める筋を演じるダンスで、サンティアゴの仮面（写真 41）、御主の仮面（写真 42）に加えて、村によって異なる色々の配役の仮面が出る [MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 138-140; MOYA RUBIO 1978: 70]。この芸能のパリエーションは多く、どんな脇役の仮面があるかを知るのはむづかしい。

サンティアゴのダンスにピラト（キリストが処刑された頃ユダヤを支配したローマの総督）の仮面が出るのが多いらしいが、当館の資料ではサン・マテオのダンスに出るピラトの仮面が多い（写真 43）。

(6) アルチャレオのダンスの仮面

射手 (archer) から由来したダンスの名で、サンティアゴ聖人に対して異教徒の射手が敗北する物語が演じられ、仮面はサンティアゴ、カピタン・サバリオ（アルチャレオのリーダー）を加えた三種である [MOYA RUBIO 1978: 58-61]。ただし、Cordry によると [1980: Figs. 286, 287], アルチャレオを助けるピラトとモロの仮面も出場するようである。アルチャレオの仮面は憂いを含んだ表情で、口を少しゆがめているのが特徴で（写真 44）、敗者の表情といえよう。



写真44 チャレオ ゲレロ州 グアムス
ティトラン [108471]

現在入手できる仮面ではわからないが、古い仮面をみると、アルチャレオが土着社会の戦士を表現していたようである。Moya Rubio [1978: Fig. 55] にみる一点は、アルチャレオの仮面の頭飾りに青いすずめが乗っていると説明されている。一方、Cordry [1980: Fig. 287] は Moya Rubio の指摘している仮面に酷似したアルチャレオの仮面の頭飾りを鷲が乗っていると説明し、別に虎（ジャガー）が頭飾りに乗っているアルチャレオの仮面もあるといっている。とすると、鷲と虎と合わせて、鷲の戦士と虎（ジャガー）

の戦士が表現されていることになり、元々はアルチャレオは先スペイン期の戦士を表現していたことになる。

(7) タストアネスのダンスの仮面

アルチャレオと対照的に敗者復活戦を演じるのがタストアネス (Tastoanes) のダンスの仮面である。この芸能はサカテカス州とハリスコ州に限られており、土着の指導者であるタストアン (tastoan ナワ語の tlatoani=主, 長から由来した) がサンティアゴを破る筋になっており、この地方に動乱の続いた19世紀末に史実と逆のこの筋が出てきた、と Warman は考えている [1972: 132-133]。彼は1899年の上演例を引いて、サンティアゴがタストアン一派に敗れる物語を記録しているが、最近 Gillmore が現在の上演例を詳細に伝えている [1983: 106-107]。これによると、サンティアゴは性的冗談の対象になった末、“皮はぎ”に会い(巻きつけられていた毛布をはぐ仕草で表現される)、胸から血を沸き出しながら死ぬことになっている。また、19世紀末にはなかった要素が1910年の革命以降に入っている。以前には、サンティアゴ登場以前に土地測定の場面があり、三博士が出場した。こうして、スペイン政府による土地授与を演じていたのであった。革命後は代りにインディヘナ、牧場主、鉱山主が出てくる。つまり、19世紀末と1910年以降に二つの再解釈がこの芸能に起こったのである。

上記のような「さかしまの世界」を演じるにふさわしく、タストアネスの仮面には



写真45 タストアン サカテカス州 フチピリア [108459]



写真46 タストアネスの一配役、キレナイカ人のシモン? ハリスコ州 サンタ・クルス・デ・ラス・ウェンタス [131774]

ただならぬ表情がある。古い土製仮面には土くさい逞しさがある [CORDRY 1980: Fig. 160]。一番例の多いのは口をゆがめ、薄笑いを浮べた木製の仮面である (写真 45)。他に、皮製で顔の左右が二色に塗り分けられ、太い赤い唇を持ったものがあり、二心ある裏切者のケレナイカ人のシモンを表わしているらしい (写真 46)。加えて、鼻や額にとがげ、さそり、等をつけた悪魔仮面の系統のものもある (写真 47)。これらのタストアン側につく一連の悪役としてヘロデ王、ピラト、悪魔、盗人バラバ、裏切り者の犬の仮面があるようだが [GILLMORE 1983: 107-108], セットで入手するのはむつかしそうである。

(8) マタチネスのダンスの仮面

中央から北メキシコに分布する芸能であり、リーダー、王達、音頭取り (ダンスが変わる時を知らせる役)、道化、等の配役があるが [MOMPRADÉ y Gutiérrez 1976: 194-195], 当館にあるマタチネス (Matachines, Matlachines) 用仮面は何の配役と判定しがたい長鼻の仮面 (写真 48) とカトリン (上流の士。後述する) の仮面があり、いずれも芸能内の役割が不明である。

(9) ハルディネロスのダンスの仮面

ハルディネロス (Jardineros) のダンスはムーア人とキリスト教徒の王をリーダーに双方8人一組、計16人で踊り、オアハカ州のサン・バルトロ・コヨテペック (San

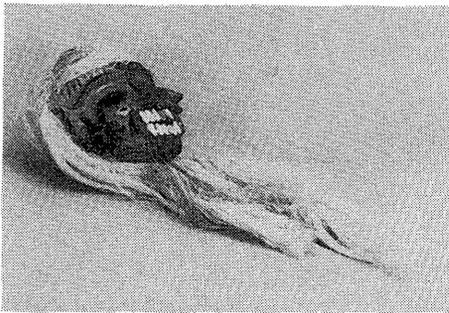


写真47 タストアンの悪魔仮面? ハリスコ州
サンタ・クルス・デ・ラス・ウェンタ
ス [131780]



写真48 マタチネスの一配役の仮面 プ
エブラ州 テパンコ [126918]



写真49 ハルディネロ オアハカ州 サン・バルトロ・コヨテペック
[131887, 131875]

Bartolo Coyotepec) と他一村でみられる [MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 126]。元型に紙をはりつけ、ろうで堅めた仮面で、配役の地位に応じた冠をつけている (写真 49)。

ハルディネロスに類似した芸能に「フランスから来た12人組」(Doce Pares de Francia) があるが、仮面は使用されないことが多い。

(10) アパッチェのダンスの仮面, その他

この芸能に関する情報 (オアハカ州とハリスコ州の例については [MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 164, 174], ケレタロ州の例については [MOYA RUBIO 1978: 177]を参照) からわかるのは、芸能としての定形がなく、仮面についての情報がないことである。このダンスとは別にプエブラ州ウェホツィングのカーニバルにアパッチェ仮面が出演したりして [CORDRY 1980: 68, Figs. 161a, 182], 出番の多い仮面であろうと思われる。さらに、資料をえないと、一般化しにくい。

「モロとクリスティアノス」のジャンルに入る芸能の仮面は他にもあるはずで (例えば、フェルナンド王, モロの王, 天使と悪魔の出るダンス [MOYA RUBIO 1978: 166, Fig. 165], オアハカ州フストラワカの赤いチロロ (Chilolo) のダンスの仮面 [CORDRY 1980: Fig. 275]), 機会ある毎に少しずつ補充していくとよい。

4) 寓意劇, 縁起物用仮面

「モロとクリスティアノス」がカトリック教徒がムーア人を武力で制圧する筋を演じているものなら、4) のジャンルは寓意劇や縁起物を演じて異教に対するカトリックの優越を表現したもので、次の四つのダンスが仮面を伴っている。

(1) クルピテスのダンスの仮面

ミチョアカン州ウルアパンのサン・ファン・ヌエボ村のダンスの仮面で、プエブラ州のサンテロ仮面（教会付属の彫刻師のつくる上質の仮面）に匹敵する彫りのなめらかさを持っている。御子イエスを見失ったサン・ホセとマリアが山から集まった人、クルピテ（Cúrpite タラスカ語で集まる人を意味する）の助けをかりて探し出す筋のダンスである。サン・ホセの仮面（写真 50）はタレペティとも呼ばれ、仮面に頭飾りをつけ、手には杖を持ち、その上部にはラバの頭部を彫った飾りがついている [MOYA RUBIO 1978: 63, 69]。マリアの仮面は当館にはないが、この仮面は女性の踊り手に被られることを特記しなくてはならない [MOYA RUBIO 1978: 69]。メキシコでは仮面はたとえ女性仮面でも男性が使うのが原則で、このダンスのマリアの仮面だけが何故、女性に使用されるのか理由はわからない。

山人クルピテの仮面（写真 51）はサン・ホセやマリアと同じ造りの仮面で、表情

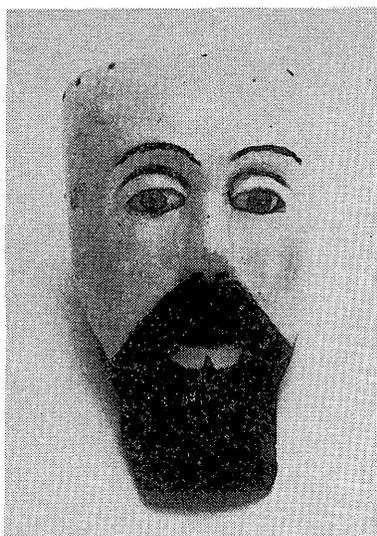


写真50 サン・ホセ ミチョアカン州
サン・ファン・ヌエボ [108408]



写真51 クルピテ ミチョアカン州 サ
ン・ファン・ヌエボ [131851]

だけが異なる。Mompradé y Gutiérrez の写真資料 [1976: Figs. 201-203] から判断するに、クルピテには男女の仮面がある。また、タラスカ（族）の仮面劇の研究者 Esser の資料 [1983: 118-119] から判断すると、クルピテの女の仮面は年末から年始にある役職交代の折に演じられる仮面劇の老女役（マリンギーリャとかマリアと称される。女の意味）にも使われている。

(2) 八人の愚者、七人の悪玉のダンスの仮面

この種の芸能の仮面は当館に欠けているが、分類上欠かせないので、ここで触れておく。「八人の愚者」(Los Ocho Locos) のダンスでは、仮面をつけた神父がまとめ役で、若い娘／恋人、学生／賭け事師、農夫または牧夫／医者、死／悪の四組で八人の仮面が踊り、神父の合図につれてゲレロ州特有のソネット曲 (son) を幾つか披露するのが余興である [MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 196, 205; MOYA RUBIO 1978: 104]。

(3) 三つの魂の力のダンスの仮面

ゲレロ州の芸能で、魂と悪の戦いを表現し、悪魔、悪魔ルシファー、肉、魂、記憶、理解、自由意志、天使、聖母マリア、世界、死（写真 52）が仮面をつけて現われる。抽象的な概念が多く、これを仮面にどう表現したか興味深い。Cordry の写真には [1980: Fig. 293]、口を曲げたピンクの罪の仮面の顔面の一方に茶色の時間の顔、他



写真52 死 ゲレロ州 [139351]

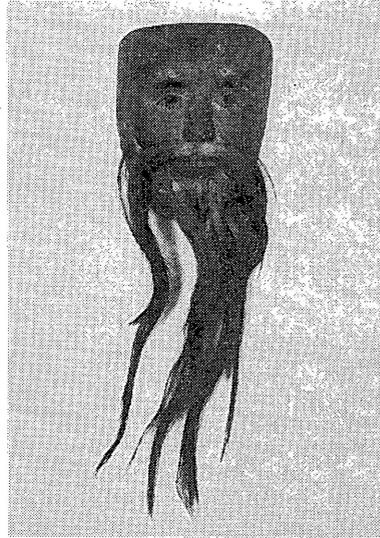


写真53 隠者 ミチョアカン州 [139346]

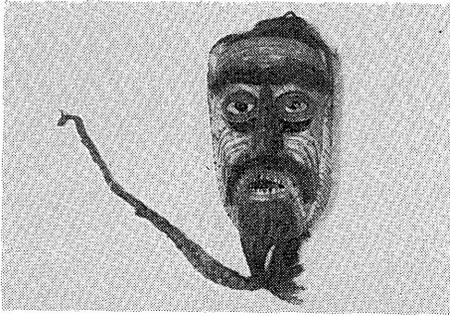


写真54 隠者 グアナフアト州 ラギーリャ
[139356]

方に死(=骸骨)の顔のついた仮面があり、「時間一罪一死」の仮面(三つの魂の力(Tres Potencias)のダンス用)とあり、これが一つの表現方法であったらしい。この芸能の仮面は現在入手しにくい。

(4) 牧人のダンスの仮面

ミチョアカン州のオクミチョ(Ocunich)の例がよく知られているが、

中央メキシコと北メキシコに分布している芸能(Pastorela)で、隠者(ermitaño)と悪の群れが戦う筋である。ミチョアカン州の古い仮面(写真53)には、この地方の技術の高さを思わせるスムーズな彫りがみられるが(クルピテの仮面と同様の彫り)、近年の隠者の仮面は一般に彫りが雑である(写真54)。しかし、どれも長めの顔と長い顎ひげが特徴である。他に、各種の悪魔仮面、マリンチェ仮面が登場する[CORDRY 1980: Fig. 259]。また、額から長い突起の出た女性仮面も登場するというのである[CORDRY 1980: Figs. 56-57]、何の配役をつとめているのかわからない。

(5) パラチコのダンスの仮面

チアパ・デ・コルソ(Chiapa de Corzo)起源で、伝承によると、18世紀の中頃、或る母親が息子の病いの快癒を聖セバスティアンに祈って、願が成就された時には喜捨をするという約束し、願がかなえられるという物語から由来する芸能であるとされている[Moya Rubio 1978: 69]。別の文献によると[Mompradé y Gutiérrez 1976: 205]、17世紀由来の物語で、喜捨の物語にも少し差がある。また、チアパス州で調査された落合一泰氏は、フェリペⅡ世の王子の誕生を祝って踊られたのが起源である、と土地の人から聞いておられる(1986年5月21日の研究会でのコメント)。もしか、フェリペⅡ世ではなくて、フェリペⅣ世の王子バルタサル・カルロスの誕生記念のことではないか、と私は思う。これは17世紀のことで、この記念祝祭はスペインから植民地に命令されて、色々の場所で祝われているからである。いずれにせよ、パラチコの起源については諸説あることがわかった。

パラチコ(Parachico)は「子供のために」ということで、(子供に当たる)青年の仮面はすべすべした、プロの仮面師の手になるもので、古いものには塗色された目がついているが、近年のものはガラス玉が入っている(写真55)。イストレ(竜舌蘭か



写真55 パラチコ チアパス州 アル
パロ・オブregon [126912]



写真56 パラチコの牛 チアパス州
サンタ・マリア・デ・ラス・
ガルサス [108465]

らとった繊維)の頭飾りをつけ(スペイン人の髪の色を表わしている、とされている。[MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 205]), 種々の色のリボンがつけられている。

なお、パラチコの青年の仮面はカララー(鹿)のダンスでカララー役の男も顔に被る(腰には鹿の頭部の形をつけている)。1940年頃まで、カララーは山の神を表現した仮面を被っていたらしいが、いつの頃かパラチコの仮面に替えられたらしい[MOMPRADÉ y GUTIÉRREZ 1976: 123-124]。

パラチコのダンスを統率するパトロンの仮面は大人の表情をしている。

リボンをつけたイストレの頭飾りをつけた雄牛の仮面(写真56)もパラチコのダンスに出る。役割については資料がない。

5) カーニバル仮面

ベラクルスやイダルゴ州の仮面は笑いを含んだもの(写真57)や動物仮面が多い。造りは一様に雑である。

トラスカラ州の仮面は木製でガラスの目に入ったサンテロ仮面で、やはり笑い顔になっている(写真58)。

プエブラ州ウェホツィンゴのカーニバル仮面は種類が多い。カーニバルが時代祭りの様相を持っており、配役が多く、それだけ仮面も多くなるわけである。まず、仏軍兵士(写真59)やスアボ(仏軍内のアルジェリア人庸兵)(写真60)の仮面がある。仏軍兵士は皮製で、口ひげがついているが、スア

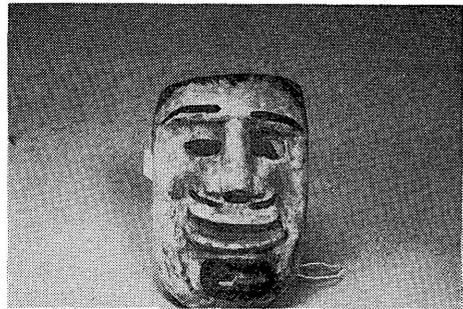


写真57 カーニバル仮面 ベラクルス州 イ
ーゴ [108438]

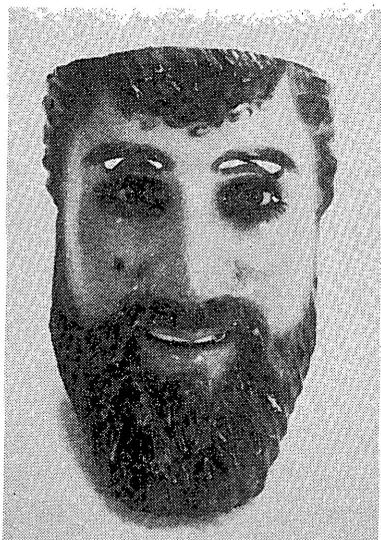


写真58 カーニバル仮面 トラスカラ州
ウェホツィンゴ [108432]

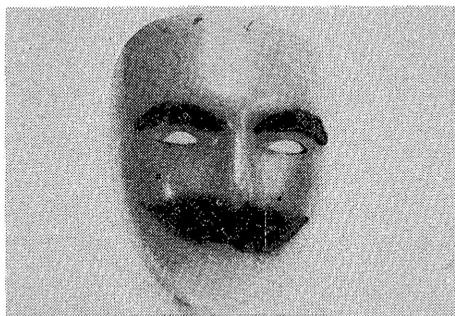


写真59 フランス兵 トラスカラ州 ウェホ
ツィンゴ [132418]

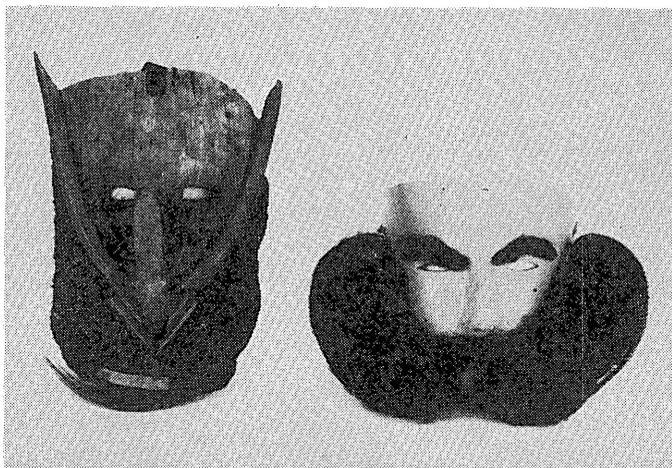


写真60 スアボ (仏軍内のアルジェリア人庸兵) トラスカラ州 ウェホ
ツィンゴ [132229, 132416]

ボほど目立たない。スアボの内、右は皮製、左は木製であるが、いずれも頬ひげの大きさが目立つ。これらの仮面は見分け易い例であるが、分類しにくい場合もある。入手していないが、メキシコ兵 (zapadores) の皮製仮面もあり、フランス兵、スアボ、メキシコ兵の三者に似たものも多く、文献資料 [SALMERÓN y HORGASITAS 1974: Figs. 604-614] と仮面についている資料とに矛盾のあることが多い。この三役に加え、ア



写真61 チネロ モレロス州 テポストラ
ラン [131849]



写真62 チャパイェカ ソノラ, シナロ
ア州 マヨ(族) [132571]

ステカ, トルコ人, サカポアシュトラの人 (Zacapoaxtla プエブラ州の山地の村の名), 山の人 (serrano), 黒人の仮面が登場するが, 未だ本館では入手していない。

モレロス州のテポストランのカーニバル仮面は金網をはったチネロ (chinelo) (写真 61) であるが, 起源は不明である [MOYA RUBIO 1978: 90]。モレロス州ではチネロには「異教徒」の意味があり, ムーア人と関連があると考えられる。また, ヨーロッパの道化ピンチネロ (pinchinelo) との関連を説く人もいる [INGHAM 1986: 128]。

チアパス州のカーニバル仮面にはチェナロー, ウイスタン, ベネスティアーノ・カランサのものがあるが [INSTITUTO DE LA ARTESANIA CHIAPANECA n.d.], どれも本館には欠落している。

6) 復活祭用の仮面

1)一(1)と重複するので, そこで触れなかったもののみ記すことにする。

ヤキ(族)やマヨ(族)の復活祭に組織されるチャパイェカム (Chapayekam) の仮面には革製のヘルメット仮面に角がつけてあるもの [CORDRY 1980: Fig. 71], 毛皮に目をくり抜いた仮面 (写真 62) の二種ある。また, 最近では木製仮面も出てきた [LUTES 1983: Plate 13]。1)一(1)で既記のべたコーラの動物仮面と同様, チャパイェカム仮面は儀礼が終ると焼かれていた。



写真63 ペニテンテ（悔悟する人） サ
ン・ルイス・ポトシー州 タン
ハラス [108469]



写真64 チャントロ（祈願者） イダル
ゴ州 テネハパ [126915]

Cordry [1980: Fig. 98] は百人隊長の仮面をあげて、18—19世紀の作品と判断している。現在、この種の仮面は仮面のマーケットに出てこない。

民族誌や仮面についての雑多な資料から判断すると、復活祭の時期には色々な芸能が演じられており、色々な仮面が活躍していると思われる。例えば、ペニテンス（悔悟）のダンスの仮面などがある（写真 63）。

7) 万霊節用の仮面 ——チャントロ——

万霊節に村人が各家をめぐる祭壇の供物を下げる習慣があるが、これにちなんであるのがワステカ地域に多いチャントロ(Chantolo, Xantolo)の仮面である[OGAZON 1981: 17]。各家を訪問する人が仮面を被るのか、仮面をつけた人が踊るのか、よくわからないが、仮面に添付された資料には「祈願者の踊りに使用」、とだけ記されている。

民族誌では、死して先祖となった老人達が供物を下げにくる、とされており、チャントロの仮面には深い皺が彫りこんである（写真 64）。

8) 死の仮面

「八人の愚人」、特に「三つの魂の力」のダンスに出場する死の仮面が多い。他にも、

色々な祭りの場に出て、道化役を演じる。また、都会のイベントに出ることも多い。

9) 道化仮面

種々の芸能に出て道化役と同時に見物人の整理係りを務めるのは悪魔仮面、死の仮面、それと道化専門の仮面である。前二者にとっては、道化の役は仮面の副的機能である。

道化専用の仮面にはバルトロ (Bartolo)、ウェウエ (Huehue 老人)、ウイシュキトリス (Huixquitlis) の三種がある。

バルトロは目鼻立ちのはっきりした西洋風の顔の道化で (写真 65)、牧人のダンスに出ることが多い [OGAZON 1981: 15]。

最も一般的な道化仮面はウェウエで (写真 66)、ビエホ (Viejo 老人) と呼ばれている例もある。ミチョアカン州のタラスカ (族) に特有なビエホ仮面 (写真 67) は火の神から由来するものとされ、タップ・ダンス (zapateado) のリズムに乗って踊る。

老人の特徴を持った仮面の分布は広い。私のいたミヘ (族) の村アユトラではアブエロ (Abuelo 祖父) と呼ばれ、黒光りのした、うす笑いをうかべたウェウエ型の仮面で、ネグリースのダンス (Los Negritos) の道化役をつとめた ([BEALS 1945: Plate 9] に仮面の写真あり)。ミヘやサポテカのビエホがメキシコやトラスカラのウェウエと関連がある、という研究者が居るが [BRICKER 1973: 201, 205]、ミヘの村には上記のアユトラ村のように、いかにもウェウエらしきものと、動物的様相をそなえたウエンチェス (Huenches) がある。例としてはミヘの村チチカステペックの仮面が



写真65 バルトロ(道化) ミチ
ョアカン州 [139368]

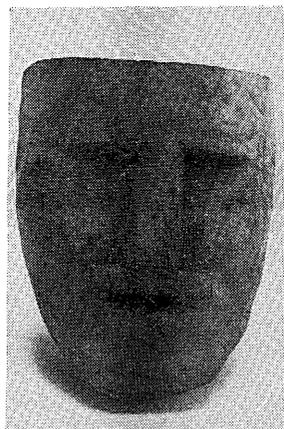


写真66 ウェウエ(道化) プエ
ブラ州 ラ・フンタ・ポ
サ・ラルガ [132495]

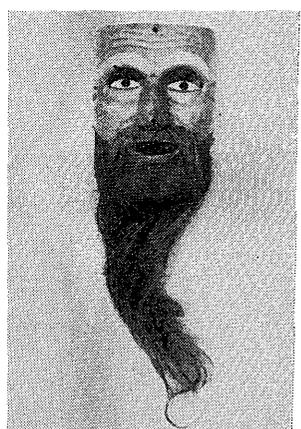


写真67 老人 ミチョアカン州
[139357]



写真68 ウェンチェスのダンス オアハカ州 ミヘ(族) チチカステペック

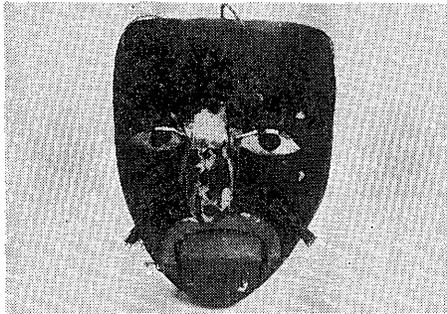


写真69 老“ウィンチェス” オアハカ州 サポテカ(族) [131870]

あり、鼻と口の部分が盛り上った動物らしき仮面である(写真 68)。このウェンチェスはサポテカの村ヤララグのウェンチェスのダンスの仮面を真似たもの、とミヘの村では言われているが、この説は的をえているらしく、サポテカのウェンチェスの仮面がやはり動物の様相を呈していることである(写真 69)。また、プエブラ州山地の村のウェウエ仮面は鼻から口の部分が盛り上った動物らしきものであり(写真 70)、ミヘのウェンチェス(写真 68)に極めてよく似ている。例が少なく、判断がむつかしく、ウェンチェス仮面をウェウエと、どう関連づけていけるか問題が残る。

ウェウエ、ピエオ、アブエロと名づけられた老人の仮面は始源の世界と関わりがあるらしく、一年の節目をつける儀礼や祭りにたち現われる。チアパス州のツォツィル(族)の村シナカンタンでは一月の聖セバスティアン祭に役職交代の儀礼があり、アブエロ(abuelo 老人)とアブエラ(abuela 老女)の仮面をつけた役が大活躍する[ブリッカー 1986: 2章]。また、ミチョアカン州のタラスカ(族)の間で年末から年始に

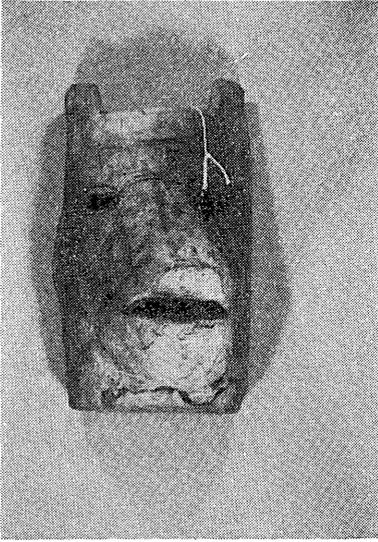


写真70 ウェウエ プエブラ州 ラ・フ
ンタ・ポサ・ラルガ [132496]



写真71 “ウェスキセレス”(道化) ゲレ
ロ州 トラコテベック [139362]

行われる役職交代の儀礼にもアブエロとアブレラの仮面が登場する [ESSER 1983]。

ウェウエほど一般的ではなく、分布もゲレロ州や中央メキシコに限られているのがウィシュキトリス (Huixquitlis) (写真 71) である。これが道化であることは Ogazon により指摘され [1981: 15], Sepúlveda Herrera はウェイキストリ (Hueyquistli) と表記し、トラコロロス、テクアニ、それとカーニバルのダンスに登場するとしている [SEPÚLVEDA HERRERA 1982: Figs.30, 40, 44. これらは写真71に類似している]。この指摘のようにトラコロロスのダンスに登場するためか、仮面に添付された資料に混乱が起こっている。とかげが顔面についた農民のトラコロロ風仮面 (1)–(6) 参照) にウィシュキトリスという資料名がついている仮面があり (購入手配中), これが実際にはトラコロロなのかウィシュキトリスなのか不明である。この例からわかるように、ウィシュキトリスには不明な点が多く、これから資料の点数が増えれば、少しは見通しがつくだろう。ウェウエと異なり、ウィシュキトリス仮面の由来についても一切資料がない。

10) フィエスタに附随する仮面

芸能そのものでなく、フィエスタの前触れや楽器の役目を果たす仮面がある。

第一に、フィエスタの前触れ役の被る四足獣動物の腰骨を仮面にしたもの [CORDRY

1980: Fig. 156] がある。

第二に、ラスパドール (raspador 削るの意味) の仮面で [CORDRY 1980: Fig. 267], 長い鼻に横の筋が削ってあって、その部分をこすると音が出る。

第三の例も楽器の役目を果たす仮面で、下部に人面がつき、その上に鼻が乗っている背の高い仮面で [CORDRY 1980: Fig. 50], 時折、踊り手が頭上に乗せるだけで、鼻の翼に彫りこまれた筋に木の棒を走らせて音を出すのが主目的の仮面である。

この種の「仮面」は現在では極めて数少なくしか存在していないと思われる。

11) 風俗, 職業に関わる芸能の仮面

資料が少ないが、民俗社会の人々が行った社会批判の一端が読みとれる例がある。

(1) カトリン (上流の士) の仮面, マリンギーリャ (白人女性) の仮面

Moya Rubio によると [1978: 97], カトリンの仮面は仏干渉戦争時の上流社会をパロディー化したダンスに用いられ、プエブラ州やトラスカラ州から発生したとされている。ところが当館所蔵のカトリン仮面 (写真 72) の殆どはマタチネスのダンス用と記されている。また、別のカトリン (写真 73) は蛇のダンス (トラスカラ州のサンタ・アナ・パパロトラ村のダンス。詳細は [MOYA RUBIO 1978: 70, Fig. 68] 参照) の若い男役になる。だから、カトリン仮面は複数のダンスに登場するといえ



写真72 カトリン (上流の士) プエブラ州 [108353]



写真73 カトリン (上流の士) トラスカラ州 サンタ・アナ・パパロトラ [139358]

よう。

白人女性の仮面(写真 74)はマリ
ンギーリャ(女という意味)で、色々
なダンスに出るが、目鼻立ちのはっきり
していること、頬と唇に紅が強くさし
てあることが特徴である。化粧をしな
い土着民の目に白人女性とはこのよう
に映ったのだろう。



写真74 マリンギーリャ(白人女性) オアハカ
州 [108414]

(2) マヌエレスのダンスの仮面

このダンスには不明な点があり、仮面の判定にも疑問が残る。Cordry [1980: Fig. 305] と Ogazon [1981: 21] によると、マヌエレス (Manueles) は恋をめぐる家族劇で、若者と婚約者、若者を愛する娘、家族の人々の仮面が出る。一方、Moya Rubio によると [1978: 90], インディヘナに対して横暴に振舞うスペイン系の夫婦を風刺したダンスであるということで、老人と老女の仮面が出て、貪欲な表情で、老人の口からはくわえタバコがはみ出ている。この説明をつけておりながら、Moya Rubio は Cordry の説明に合う家族の仮面をも載せている [1978: Figs. 83-84]。Moya Rubio のマヌエレスの説明は他人の文献に頼っているの、上の矛盾を説明しきれていない。

最近、民博が購入した研究用フィルムにゲレロ州ティシュトラのフィエスタを扱ったものがあり(1985年、永田収氏撮影)、その中にマヌエレスのダンスがみられる。男女の仮面と、その動きから、このマヌエレスは Cordry と Ogazon のいう恋物語らしい。ところが、永田氏の情報によると、このダンスを見ている村人(?)の仮面にくわえタバコのものであった、ということである。



写真75 マヌエレスのダンスの恋人役の娘(左)、娘の母(右)? ゲレロ州 [108379, 108386]



写真76 マヌエレ ゲレロ州 (左) チチクアルコ, (右) 地名不明
[108378, 108374]

上記のような不明な点や矛盾を反映して、当館のマヌエレスにも家族の仮面(写真75)とくわえタバコの男の仮面(写真76)の両方がある。

(3) 黒人のダンスの仮面：黒人ファンとパニョル(スペイン人)の仮面を含む
このダンスにも二様の解釈がある。Warman [1972: 157] は、踊り手が二列になって棒を打ち合うことから、敵と味方の戦う「モロとクリスティアノス」の部分的表現であろう、と考えている。一方、Mompradé y Gutiérrez [1976: 206] によると、このダンスは初期の植民地時代に起源があり、インディヘナがエンコメンドロに税を払



写真77 ロス・ネグリートス(黒人)のダンス オアハカ州 ミヘ(族)
アユトラ

う折に踊られ、女 (Maringuilla) の仮面が出場し、手にした蛇で黒人を打つ場面もある、という。

仮面資料と分布から見て後者の筋はベラクルス州の資料に合い、他地域の黒人仮面には Warman の説明が当たっている。私がフィールドとしたミヘの村でも黒人のダンス (Los Negritos) は黒い仮面が二列に並んで踊る戦闘の

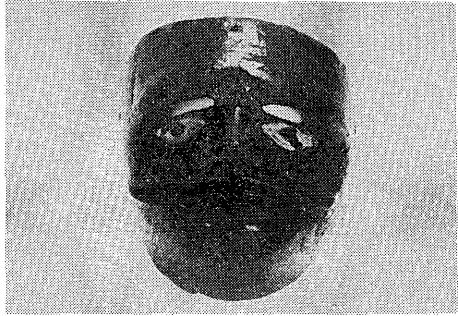


写真78 ネグリート (黒人) オアハカ州 [108415]

ダンスであった (写真 77)。このダンスには地方毎に異なった演出があるが、黒か濃茶の仮面 (写真 78) であることは何処でも同じである。

黒人の仮面とは別の黒人ファン (Juan Negro) と白人パニョル (Pañol エスパニョルの略で、スペイン人の意味) の仮面がセットで (写真 79) ベラクルス州とイダルゴ州にみられる。ファンが娘に恋するが、主人のパニョルに横取りされるという筋であるが [OGAZON 1981: 21], 仮面は両方共、黒人のダンス用とされているから、Mompradé y Gutiérrez の説明していた方の黒人のダンスの一部を演じる仮面なのかもしれない。黒人ファンとパニョル仮面が抽象化されたものもある (写真 80)。

また、「黒人のダンスに出場する王様用」と記された黒と白の仮面もあるが (写真 81), この役割については一切資料がない。

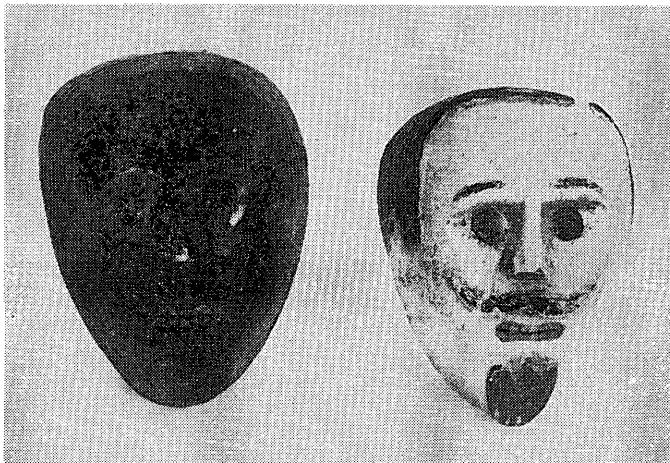


写真79 (左) 黒人ファン, (右) パニョル (スペイン人) ベラクルス州 ナランハス [108452, 108453]

(4) 牛飼い, 大工の仮面

牛を呼ぶため口をとがらせている牛飼いの仮面や上流の紳士カトリンと似た大工の仮面がメキシコに広く分布しているが, 当館は未だ入手していない。

12) 芸能名が不明な仮面

モヒーカ (Mojica) のダンスの仮面とされているものがあるが (写真 82), このダンスについては情報はえられない。

その他, ティベリオ (Tiberio = César) の仮面と記入されたものも用途が不明である。

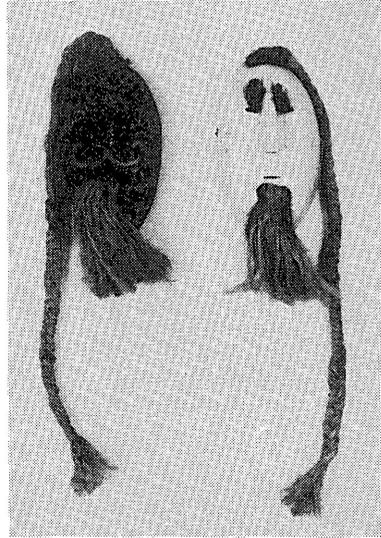


写真80 (左)黒人ファン, (右)パニョル (スペイン人) ベラクルス州 ナランハス [108455, 108456]

3. 結びにかえて

——仮面の将来について——

分類はあくまで分類であって, 項目間の境界には流動性が必ずある。例えば, 上記の分類で, 1) の (2) の動物, 虫, 魚, 等アニミスティックな世界を表現する仮面や (3) の悪魔仮面は3) 以降の数々のダンスやフィエスタに端役として頻繁に登場する。また, 1) の分類の仮面そのものが登場しなくても, 1) の分類に属する仮面の特

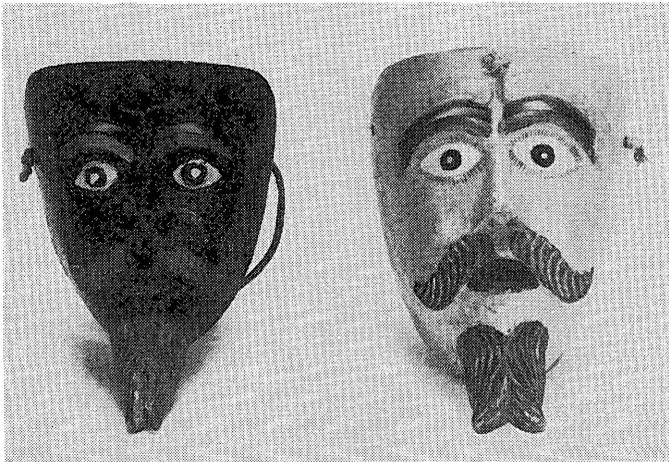


写真81 黒人のダンスの王? プエブラ州 チチキーラ [139364, 139363]

徴であるアニミスティックな土着の象徴は3)以降の分類の仮面にも適用される。例えば、マリンチェ仮面にとかけがつけられたり、アルチャレオの古い仮面には虎や鷲の象徴がつけられたり、タストアネスの仮面の一つの種類には、とかげや蛇がつけられ、いずれも魔性や魔力を表現している。そのようなわけで、1)の分類のアニミス

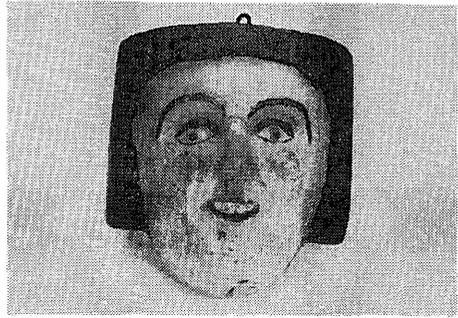


写真82 モヒーカ? ベラクルス州 ワステカ(族) [126920]

ティックな仮面や象徴はメキシコの芸能には遍在的な存在であるといえる。

アニミスティックな仮面が或る種の芸能に強烈に出てきたり(例えば、虎ダンス)、カトリックの教えを伝える芸能にも(例えば、牧人のダンス、「モロとクリスティアノス」のダンス)見え隠れすることが、民俗カトリックの芸能の楽しさと解放性をもし出す大きな要因になっているだろう。その雰囲気を与えるためには、具体的に一つの芸能を詳しく紹介するしか方法がないので、別の機会に譲りたい。

さて、本稿で紹介したような数々の仮面は何時まで存続しうのだろうか。Cordryは名著『メキシコの仮面』[1980]の序文で、仮面製作の盛時は過ぎた、と述べているが、確かに、彼が収集した1930—60年代が良質の仮面に出会える時期であったろう。その頃は未だ民俗文化が豊かに息づいていた時代であったからである。それに比べて、1970—80年代には仮面は存続の危機に立たされている。

例えば、私が居たミへの村々ではダンス用の仮面は一揃えしかなく、教会の控え室に大切に保管されていた。そうかと思うと、アユトラ村のアブエロ(老人)の仮面は役者個人が自分の家に置いていた。これらの木製の仮面は先進文明圏の山地サポテカの村ヤララグで買ってきたものだということであったが、1970年代半ばには、ヤララグに出かけても仮面を入手できなくなっていた。だから、トラウィトルテペック村では、老人のダンスの仮面がなくなった折、補充できず、神父がメキシコ・シティで買ってきたゴム製のマスクを踊り手がつけるようになってしまった。この例のように、伝統芸能用の仮面は容易に手に入らず、保存しなければ村から消える運命にある。また、大きな博物館や個人が仮面のコレクションを始めると、国際的な仮面のマーケットが出来上り、間接的ではあっても村から仮面を買収する結果になりかねない。

村に欠けた仮面が補充されても、聖人像と同様で、新しいものは画一的で粗雑になりがちである。それに比べて、仮面製作の一定の技術水準が保たれ易いのは教会に

祭具を納めるサンテロの作るものであろう。プエブラ州やトラスカラ州の場合、サンテロは教会からくる祭具の注文で生活が成り立ち、プロの彫り師の手で仮面を作れるからである。

植民地時代由来のダンス用の仮面の製作は下火である一方、新しい仮面の製作もみられる。一つは観光客やコレクターを意識しての仮面作りで、旧くからある仮面をモデルにして作るが、仮面はダンスに使われるわけではないので、被れない装飾用の仮面ができ上る。本館でも、何点かの仮面に「装飾用」という注意書きが必要になっている。ゲレロ州のイグアラには本物のダンス用仮面に似せて仮面を製作する工房があるとのことで[JACOBSON and FRITZ 1985: 14]、いわゆる偽物が国際的に出まわってくる原因の一つにもなっている。この種の仮面がコレクションにまぎれこむと、真質の見分けがつきにくく、仮面の分類がますます困難になってくる。

新しい仮面の製作といっても、上記のような偽物の製作ではなく、新しい作品を売り物として作る例もある。ウィチョルの作るビーズをはりつけた装飾用仮面（写真83）がその例である。このような「観光客向け芸術」(tourist art) [GRABURN 1976]は買い手に左右されて粗悪になりがちであるが、その混乱のなかから幾つか魅力的な作品が出てこないとはいえない。

上記のような新しい流れがあると同時に、以前からの仮面も生き続けている。ゲレロ州のオリナラーのラッカー漆りの虎仮面は今も作られ、周辺の村々でも使われて

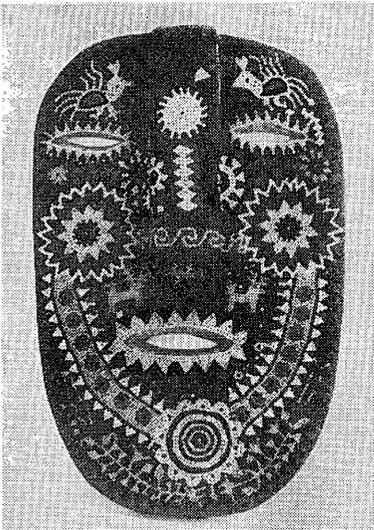


写真83 装飾用仮面 ウィチョル(族)
[131738]

いる。また、ミチョアカン州の村々には仮面作りの伝統が生きつづけ、オアハカ州のハミルテペック地方でも少数の製作者が地方色豊かな仮面をつくり続けている。また、チアパス州ではパラチコ仮面を作る工房がある。このように、仮面製作の拠点がメキシコ全土に散在しているのが現状で、今しばらくは仮面製作のエネルギーが続くだろう。

最後に、仮面を分類している過程でわかってきた現存の所蔵品に欠けている仮面を本稿の番号順に挙げておく(「」はダンス名)。

1)-(2) こうもり仮面

(6) 屠殺者(rastrero)の仮面で口が大

きく曲ったもの

鹿の仮面

老人・老女の仮面

犬 (Maravilla) の仮面

医者 of 仮面 (以上, 虎ダンス用)

2) ヤカテクトリ (Yacatecutli)

サク・ホル (Sak-Hol)

3) 鷲の戦士の仮面

ジャガーの戦士の仮面

マリンチュの仮面

セニョール (御主) の仮面 (ミチョアカン州ナランホ村)

アパッチェの仮面

4) 「クルピテ」の MARIA の仮面

「三つの魂の力」の仮面

「八人の愚人」のセットになった仮面

天使の仮面

「パラチコ」のパトロンの仮面

5) ウェホツィングのカーニバル仮面

アステカ

山の人 (Serrano)

サカポアシュトラ (Zacapoaxtla 村の人)

サパドール (Zapador メキシコ軍人)

黒人 (Negro)

トルコ人 (Turco)

チアパス州のカーニバル仮面

ウイスタン村

ベヌスティアーノ・カランサ村

チェナロー村

9) ウェウェ, ウィシュキトリスの道化仮面を増やす

11) 牛飼い, 大工の仮面

地方別にいうと, チアパス州の資料を収集する必要がある。ユカタン半島にはほとんど仮面がない様子である。また, グアナファトの紙製の仮面のように手軽に使われ

る仮面も収集した方がよい。

仮面収集の基礎的段階は過ぎたが、これから、きめ細かく欠落している仮面や新しい作品を集めていくと、メキシコのフィエスタをにぎわす仮面の全体像が見えてくるだろう。

謝 辞

フィエスタへの興味から出発して、私は仮面に接するようになった。何回も資料の購入を認めて下さった当館の関係者にまず御礼申しあげる。また、海外収集の折、仮面の購入も忘れずにして下さった同僚の八杉佳穂氏のこともあり難く思っている。

私は、ここ二、三年程の間に何回も収蔵庫に出入りし、写真を撮らせていただいたが、その度毎に宇野文男氏、宇治谷恵氏、飯島善明氏にお世話になった。また、神野（旧姓 熊野）恭子さん、山本（旧姓 池田）純子さん、當麻真理さん、井上祐子さん、中村ひさ子さんに度々お手数をかけた。収蔵庫の人々の御協力を得てはじめて、今回の仕事が進んだのであって、深く感謝している。

添付された写真は垂水万範氏の撮影によるものである。中に5点程不明瞭な写真があるのは私がカラーで撮ったものである。東ひふみさんにもお世話になった。

メキシコの仮面に関しては1986年5月21日の共同研究会「北アメリカの民族芸術」（代表者は当時、小谷凱宣助教授）で発表し、諸氏の御批判をいただくことができた。おかげで、本稿をまとめるに当たって、数々の修正を行うことができた。君島久子、八杉佳穂両先生は原稿を読み、貴重なコメントを下さった。お蔭で、全般に筋が通り、感謝しています。

文 献

BEALS, Ralph L.

1945 *The Ethnology of the Western Mixe. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology* 42(1): 1-176.

BRICKER, Victoria R.

1973 *The Ritual Humor in Highland Chiapas. Austin: University of Texas Press.*

1981 *The Indian Christ, The Indian King: The Historical Substrate of the Maya Myth and Ritual. Austin: University of Texas Press.*

ブリッカー, V. R.

1986 『カーニバル——マヤの祝祭とユーモア——』黒田悦子、桜井三枝子 訳 人文書院。

CORDRY, Donald

1980 *Mexican Masks. Austin: University of Texas Press.*

ESSER, Janet

1978 *Winter Ceremonial Masks of the Tarascan Sierra, Michoacan, Mexico. UCLA Ph. D. Dissertation.*

1983 *Tarascan Masks of Women as Agents of Social Control. In N. Ross Crumrine and Marjorie Halpin (eds.), The Power of Masks, Vancouver: University of British Columbia Press, pp. 114-127.*

FONADAN

1975 *La Danza de Tecuan. México.*

GILLMORE, Frances

1983 *Symbolic Representation in Mexican Combat Plays. In N. Ross Crumrine and*

- Marjorie Halpin (eds.), *The Power of Masks*, Vancouver: University of British Columbia Press, pp. 102-110.
- GRABURN, Nelson H. H. (ed.)
1976 *Ethnic and Tourist Arts: Cultural Expressions from the Fourth World*. Berkeley: University of California Press.
- HAWTHORN, Audrey
1967 *Kwakiutl Art*. Seattle: University of Washington Press.
- 今泉忠明
1985 「トラ」, 「ジャガー」『平凡社大百科辞典』。
- INGHAM, John
1986 *Mary, Michael and Lucifer: Folk Catholicism in Central Mexico*. Austin: University of Texas Press.
- INSTITUTO DE LA ARTESANÍA CHIAPANECA
n.d. *Máscaras de Chiapas*. Chiapas, México.
- JACOBSON, Lori and Donald E. FRITZ
1985 *Changing Faces: Mexican Masks in Transition*. Texas: McAllen International Museum.
- 黒田悦子
1985 「メキシコの仮面」『メキシコの民芸——大陽と神々の匠たち——』埼玉県立博物館(展示目録), pp. 89-91。
1986 「トラ仮面」『月刊みんぱく』9月号, 表紙写真の説明。
1986 「メキシコの祝祭に登場する者たち」『月刊みんぱく』10月号, pp. 8-9。
- KURATH, Gertrude Prokosch
1967 Drama, Dance, and Music. In *Handbook of Middle American Indians*. Vol. 6, *Social Anthropology*, pp. 158-190.
- LAUTER, Robert
1981 *Mexican Indian Dance Masks*. Illinois: The Lobby Gallery.
- LEONARD, Irving A.
1981 *Baroque Times in Old Mexico*. Westport, Conn.: Greenwood Press.
- レヴィ=ストロース
1977 『仮面の道』山口昌男, 渡辺守章 訳 新潮社。
- ルイ・ベドゥアン, ジャン
1963 『仮面の民俗学』斎藤正二 訳 文庫クセジュ。
- LUTES, Steven V.
1983 The Mask and Magic of the Yagui Paskola Clowns. In N. Ross Crumrine and Marjorie Halpin (eds.), *The Power of Masks*, Vancouver: University of British Columbia Press, pp. 81-92.
- MARTÍ, Samuel
1961 *Canto, Danza y Música Precortesianos*. México: Fondo de Cultura Económica.
- MOMPRADÉ, Electra y Tonatiúh GUTIÉRREZ
1976 *Historia General del Arte Mexicano: Danzas y Bailes Populares*. México: Editorial Hermes.
- MONTENEGRO, Roberto
n.d. *Máscaras Mexicanas*. México: Talleres Gráficos de la Nación.
- MOYA RUBIO, Víctor José
1978 *Máscaras: La Otra Cara de México*. México: UNAM. 1° edición.
- NASH, June
1970 *In the Eyes of the Ancestors*. New Haven: Yale University Press.
- OGAZON, Estela
1981 *Máscaras*. Museo Universitario de Ciencias y Arte. México: UNAM.
- OGIBENIN, B. L.
1975 Mask in the Light of Semiotics—A functional Approach. *Semiotica* 13(1): 1-9.

RUSSEL, Jeffrey Burton

1984 *Lucifer: The Devil in the Middle Ages*. Ithaca: Cornell University Press.

SALMERÓN, Fernando y Fernando HORCASITAS

1974 *Lo Efímero y lo Eterno en el Arte Mexicano II*. México: Fondo Editorial de la Plástica Mexicana. 2nd edición.

SEPÚLVEDA HERRERA, Ma. Teresa

1982 *Catálogo de Máscaras del Estado de Guerrero*. México: INAH.

篠田浩一郎

1983 『仮面, 神話・物語』 朝日選書。

SOCIEDAD DE ARTE MODERNO (Secretaría de Educación Pública)

1945 *Máscaras Mexicanas*. México.

谷口幸男, 遠藤紀勝

1982 『仮面と祝祭——ヨーロッパの祭にみる死と再生——』 三省堂。

WARMAN, Arturo

1972 *La Danza de Moros y Cristianos*. México: Sep/Setentas 46.